

平城京の緑釉瓦

発掘調査の最中、時に土中から鮮やかな緑が顔を覗かせることがあります。そっと土を除くと、そこから緑釉のかかった瓦が姿を現すのです。

平城京で緑釉瓦が使われ始めるのは概ね天平年間以降(728 ~)のことで、最も多く出土するのが平城宮の東院地区です。というのも、『続日本紀』には「東院玉殿」なる建物の記述があり、そこに「瑠璃瓦」すなわち緑釉瓦を葺いていたようです。この「玉殿」そのものは現在も確認されていませんが、緑釉瓦の出土はその存在を裏付けていると言えます。

緑釉瓦が出土するのは平城宮内に限りません。特徴的なのは、長屋王邸宅周辺からの出土が目立つことです。長屋王邸宅そのものからは出土していませんが、その北側と東側に面した宅地から出土していることから、おそらくは有力な貴族の邸宅に用いられていたのでしょう。

その後、緑釉瓦は平安京で最盛期を迎え、その大極殿の屋根を飾るまでになります。緑の甍はそれほどまでに、古代の人々の心をつかんでいたのです。

（都城発掘調査部 林 正憲）

